

# 谷崎潤一郎全集逸文紹介 1

細江 光

以下に紹介・翻刻するのは、雑誌「社会及国家」に掲載された谷崎全集逸文であるが、紙数の都合で、後半部は「甲南女子大学・研究紀要」(平成三年三月刊)に掲載する事になった。併せて御覧頂きたい。なお本文には、一切手を加えなかった。

「社会及国家」は、谷崎の一高英法科時代の友人たちが中心になって作った一匡社の同人雑誌で、大正二年九月に創刊され、昭和十六年四月、二九七号を以て廃刊された。ただし、誌名からも明らかな様に、これは本来文学とは無関係な、法律・経済・政治問題を扱う雑誌である。従って、谷崎も社員にはならぬ、社友(半年以上の継続購読者)として、ごく稀に寄稿しているだけである。

谷崎が寄稿したものを列記してみると、大正四年六、七、九

月号の「帳中鬼語(一)」、(二)」、(三)」、同十月号の「夢(其一)」、大正五年六月号の「ボオドレエルの詩」、大正六年二月号の「反故箱」、同七月号の「夏日小品」、大正七年七月号の「アツシヤア家の覆滅」と書簡、同八月号の「アツシヤア家の覆滅」続き」、大正八年一月号の「朝鮮雜観」、同十、十一月号、大正九年一月号の「クラリモンド」、大正十年二月号の広田作雄「半公」の推薦文、同三月号の「日本の活動写真」、同十月号の「映画のテクニク」、昭和七年十一月号の「むかしばなし」となる。

「社会及国家」は、概して文壇との関係の薄い雑誌であったが、大正八、九年頃、谷崎を介して、文壇と積極的に結び付こうとした時期があった。即ち、「社会及国家」大正八年七月号

(六九号)の「編輯者より」という欄には、(■)来月号からは谷崎潤一郎氏や芥川龍之助氏等第一流の作家の創作又は翻訳などが掲げられる筈であります。」という予告が出ており、八月号が休刊になった後の同年九月号(七〇号)の「就て八項」という欄にも、(◎)小説及び翻譯の掲載に就て 九月号より文芸欄を設けて引続き毎号文壇大家の小説及び翻譯等を掲載する事となれり(八月總會可決)。次号には別項予告の通り社友谷崎潤一郎氏及び佐藤春夫氏の翻譯二編を掲ぐ。」という予告が出ている。また同じ号の「編輯室より」という欄には、(□)次号から表紙の意匠を全然改めます。(中略)意匠は佐藤春夫氏にお願いしました」とある。この内、表紙のデザインの件は、結局取りやめになったようであるが、これらの記事から、一匡社が、ちょうど七年目を迎えるにあたって、谷崎を通してその友人の作家達に積極的に参加を求めようとしていた事が伺われるのである。恐らくはその結果であろう、「社会及国家」には、アナトール・フランス作佐藤春夫訳「人間悲劇」(大八・十、同九・二、五・八)とゴイチエ作谷崎潤一郎・芥川龍之介共訳「クラリモンド」の連載が始められる。しかし、実は佐藤の「人間悲劇」は以前「星座」に連載したものであり、芥川の「クラリモンド」も、後述する様に、旧訳を谷崎に提供したに

過ぎなかつたようである。そして、佐藤・芥川共に、これが最初で最後の寄稿となり、谷崎自身も大正十一年以降は、長くこの雑誌から遠ざかる事になった。高い原稿料を支払わない限り、文壇の人気作家の寄稿を求める事は所詮無理だったのである。なお「社会及国家」に寄稿した人の中には、他に大正十年の佐野袈裟美、昭和四、五年の中原中也、昭和十年の新居格、昭和十三年以降の古谷綱武と富永次郎、等が含まれている。

以下、全集未収録のものとこれまで初出が不明だったものについて、若干の説明を加える。

## 1. 『夢(其一)』

「社会及国家」大正四年十月号(五巻四号)

これは“Dreams, by Henri Bergson; translated, with an introduction, by Edwin Emery Slosson(1865-1929). New York, B. W. Huebsch, 1914.” (“The National Union Catalog”による)の“introduction”を飛ばして本文冒頭五ページ足らずを翻訳したものである。参考の為、該当箇所の原文も併載する。ただし、引用は同書のT. Fisher Unwin: London, 1914. 版に拠った(以下同様)。第二段落冒頭の(その題目と

云ふのは「夢」である。は、「夢とは次の様なものである。」と訳すべき所であろう。谷崎は当初、最後まで訳すつもりだったが、それを断念するに至った経緯は、次項で紹介する『ポオ・ドレエルの詩』の前書き中に述べられている。

谷崎がベルグソンを読んだのは、大正二年十月二十三日付け、及び同四年九月十七日付け（従来誤って大正五年とされてきたもの）（精二宛書簡に語られている（芸術論）の爲の勉強の一環だったと思われる。谷崎のベルグソンへの言及は、『饒太郎』（大正三・八脱稿）と『異端者の悲しみ』（大五・八脱稿）にしか見られず、しかも、この内『饒太郎』の方では、〈ジエームスや、オイツケンや、ベルグソンの著述を繙いて見るが、いつも通説しないで投げ捨て、了ふ。〉と抽象的かつ否定的に取り上げるのみである。恐らく谷崎は、この当時はまだ、〈ジエームスや、オイツケンや、ベルグソン〉をよく知っていた訳ではなかったであろう。一方『異端者の悲しみ』では、『時と自由意志』（恐らくPogsonの英訳）について、その内容にまで立ち入った言及がなされている。従って、谷崎がベルグソンに関心を抱いていたのは、大正四、五年を中心とするその前後で、その後言及がない所から見て、その関心も長続きはしなかったと想像できる。

『異端者の悲しみ』は、〈午睡をして居る章三郎〉が見ている白鳥の夢の記述から始まるが、その夢について章三郎が〈窓からさし込む初夏の真昼の明りが、仰向きに臥て居る自分の眼瞼の上に輝いて、それが此のやうな白鳥の夢となつて居る。あのはたばたと鳴る羽ばたきの音は大方風が吹くのであらう。〉と解釈する所は、『Dreams』の内、谷崎が訳さなかつた部分の“A. Krauss tells how one day on awakening he perceived that he was extending his arm toward what in his dream appeared to him to be the image of a young girl. Little by little this image melted into that of the full moon which darted its rays upon him.”とどう一節を“But the auditory sensations nevertheless play a role.”以下の論旨に即したものと考えられる。また、〈章三郎は〉想念を凝らし始めた。すると暗黒な背景の奥へ鳥の形がだんだん薄く吸ひ込まれて、ちやうど子供がおもちやに弄ぶシヤボン玉のやうな、五彩の虹を湛へた麗しい泡が無数にちらちらと湧き上つて来たが、その中で一番大きな泡の面に、奇怪極まる裸形的美姫がいつしかまざまざと映り出して、風に揉まれる煙の如く飄々と舞ひながらまづな痴態を演じて居るのを、彼はたしかに見ることが出来た。〉という部分は、明らかにこの『夢（其一）』の応用である。

“phosphenes,” such are the names that they have given to the phenomenon. They explain it either by the slight modifications which occur ceaselessly in the retinal circulation, or by the pressure that the closed lid exerts upon the eyeball, causing a mechanical excitation of the optic nerve. But the explanation of the phenomenon and the name that is given to it matters little. It occurs universally and it constitutes—I may say at once—the principal material of which we shape our dreams, “such stuff as dreams are made on.”

Thirty or forty years ago, M. Alfred Maury and, about the same time, M. d'Hervey, of St. Denis, had observed that at the moment of falling asleep these coloured spots and moving forms consolidate, fix themselves, take on definite outlines, the outlines of the objects and of the persons which people our dreams. But this is an observation to be accepted with caution, since it emanates from psychologists already half asleep. More recently an American psychologist, Professor Ladd, of Yale, has devised a more rigorous method, but of difficult application, because it requires a sort of training. It consists in acquiring the habit on awakening in the morning of keeping the eyes closed and retaining for some minutes the dream that is fading from the field of vision and soon would doubtless have faded from that of memory. Then one sees the figures and objects of the dream melt away little by little into phosphenes, identifying themselves with the coloured spots that the eye really perceives when the lids are closed. One reads, for example, a newspaper : that is the dream. One awakens and there remains of the newspaper, whose definite outlines are erased, only a white spot with black marks here and there ; that is the reality. Or our dream takes us upon the open sea —round about us the ocean spreads its waves of yellowish grey with here and there a crown of white foam. On awakening, it is all lost in a great spot, half yellow and half grey, sown with brilliant points. The spot was there, the brilliant points were there. There was really presented to our perceptions, in sleep, a visual dust, and it was this dust which served for the fabrication of our dreams. (以下省略)

## DREAMS

THE subject which I have to discuss here is so complex, it raises so many questions of all kinds, difficult, obscure, some psychological, others physiological and metaphysical ; in order to be treated in a complete manner it requires such a long development—and we have so little space, that I shall ask your permission to dispense with all preamble, to set aside unessentials, and to go at once to the heart of the question.

A dream is this. I perceive objects and there is nothing there. I see men ; I seem to speak to them and I hear what they answer ; there is no one there and I have not spoken. It is all *as if* , real things and real persons were there, then on waking all has disappeared, both persons and things. How does this happen ?

But, first, is it true that there is nothing there ? I mean, is there not presented a certain sense material to our eyes, to our ears, to our touch, etc., during sleep as well as during waking ?

Close the eyes and look attentively at what goes on in the field of our vision. Many persons questioned on this point would say that nothing goes on, that they see nothing. No wonder at this, for a certain amount of practice is necessary to be able to observe oneself satisfactorily. But just give the requisite effort of attention, and you will distinguish, little by little, many things. First, in general, a black background. Upon this black background occasionally brilliant points which come and go, rising and descending, slowly and sedately. More often, spots of many colours, sometimes very dull, sometimes, on the contrary, with certain people, so brilliant that reality cannot compare with it. These spots spread and shrink, changing form and colour, constantly displacing one another. Sometimes the change is slow and gradual, sometimes again it is a whirlwind of vertiginous rapidity. Whence comes all this phantasmagoria ? The physiologists and the psychologists have studied this play of colours. "Ocular spectra," "coloured spots,"

「異端者の悲しみ」の直後に書かれた「病癖の幻想」や「篤姫」・「詩人のわかれ」等で夢が重要な役割を果たしているのも、やはりベルグソンの「夢」を読んだ影響なのだろう。

「肉塊」には、〈全体宇宙といふものが、此の世の中の凡べての現象が、みんなフィルムのやうなもので、刹那々々に変化して行くが、過去は何処かに巻き取められて残つてゐるんぢやないだらうか?〉という主人公の述懐があるが、これは、或は「Dreams」の記憶についての次の様な一節に示唆されたものかも知れない。

“Yes, I believe indeed that all our past life is there, preserved even to the most infinitesimal details, and that we forget nothing, and that all that we have felt, perceived, thought, willed, from the first awakening of our consciousness, survives destructively.”

もしそうだとすれば、この一節は、「Dreams」に於けるプロテイノスの「エネアデス」への言及と共に、谷崎のイデア論に対する関心にも、拘わる所があったかも知れない。

なお末筆ながら、この文章は、一匡社員額田晋氏の御後継で額田医学生物学研究所付属病院額田晋氏の御厚意によって、コピーを御送り戴いたものである事を付記し、感謝を表しま

す。

## 夢 (其二)

アンリ、ベルグソン

此の一篇は一九〇一年の五月に *Bulletin de l'Institut psychologique international* に發表せられたるベルグソンの「夢」——*Le Reve*と題する小論文の翻譯なり。譯者は昨年紐育にて出版せられたる *Edwin E. Slosson* 氏の英譯より。出來得る限り忠實に、且成る可く日本語的に重譯したるものなり。讀者の爲めと云ふよりは、寧ろ譯者自身の語學の稽古の爲めに試みたり。英語にて四十三ヘエチ程のものなれば、四五回に分ちて本誌に掲載するに適當なる分量なり。

(谷崎生)

私が茲に論じようとする題目は餘程複雑なもので、心理學的、生理學的、又は哲學的な、あらゆる種類の難解にして不明瞭な、多くの疑問を惹起する題目である。随つてそれを完全に取り扱はうとすれば、それだけ長い發展を要する譯である。——然る

に今は其れ程の時間が無いのであるから、私は諸君の許しを乞うて、凡べての前提を省略し、主要ならざる部分を片寄せて、直ちに問題の中心に迫りたい。

その題目と云ふのは「夢」である。吾人は實際にありもしない物體を見ることがある。吾人は多くの人間を見て、彼等に話をしかけたり、彼等の答へを聞いたりするやうに思はれる事がある。實際は一人の人間も居ず、吾人も口を聞いたのではない。凡べて、恰も實際の物體や人間が其處に存在して居た如くである。而も一朝眼が覺めると、人間も物體も、凡べての物が消え失せてしまふ。此の現象はどうして起るのであらうか？

先づ第一に、實際其處に何物もないのだと云ふ事は眞實であらうか？

つまり私の云ふのは、われ／＼の眼や耳や觸覺等に感ぜられる或る實際の官覺が覺めて居る時と同じやうに、寢て居る時にも作用して居るのではなからうか？

試みに眼をつぶつて見る。さうしてから吾人の視覺世界に何事が生じつゝあるかを注意して見るがよい。多くの人は此の點に就いて質問を受けると、大概は「何事も生じない、何物も見えない。」と云ふであらう。それは一應尤もである。なぜと云ふのに、人は一定の練習を積まなければ、自分自身を充分に觀

察する事は出来ないからである。若しも諸君が（眼を閉じた時の視覺世界へ）必要な注意力を集注したならば、諸君はぢきに、少しづつ、多くの物體を識別するやうになる。最初一般に生ずる物は眞黒な背景である。どうかすると此の眞黒な背景の上に、光つた斑點がゆるく靜かに、行つたり來たり、上つたり下つたりする。もつと屢々起ることは、いろ／＼な色彩の斑點が、或る時はほんやりと、人に依つては又反對に實物よりも遙かに明るくきらきらと浮び出る。此れ等の斑點はひろがつたり縮んだり、形を換へたり色彩を變じたり、一つ消えれば又一つと云ふやうに絶え間なく移つて行く。その變化は、或は緩く漸々に、或は更に眩しい速度を以て旋回する。抑も此の幻影は凡べて何處から來るのであらうか？ 今迄にも此の色彩の戯れを研究した生理學者や心理學者があつた。“Ocular spectra”とか“Colored spots”とか“Phosphenes”とか云ふのは、彼等が此の現象に名づけた名前である。彼等は其れを説明して、血液が眼球内層を循環する際に絶えず發生する些細なる故障、若しくは眼を閉じた場合に眼球を壓迫する眼瞼の重みが、視神經を機械的に刺戟する爲めだと云つて居る。しかし現象の説明や命名などはどうでもよい。私は一足飛びに言つてしまひたい。——兎に角それは普通一般の出來事であつて、而も其の現象こそは、

吾人の夢を形成する主要なる材料“Such stuff as dreams are made on”を作つて居るものである。

二三十年前にアルフレッド・モオリイ氏 (Alfred Maury) が又それと殆んど同時にサン、ドゥニ (St. Denis) のデルウエイ (d'Hervey) 氏が、下のやうな観察をした。前述の色彩の斑点や浮動せる物象は、吾人が將に睡眠状態に入らんとする瞬間に、凝結し固定して、明瞭な輪廓——吾人の夢に集る所の物體や人間の輪廓を形成するに至るのであると。しかし此れは、心理學者自身が、既に半分眠つてしまつた時に観察した説であるから、直ちに信ずる譯には行かない。もつと最近に、アメリカの心理學者で、エエル (Yale) 大學のラッド教授 (Professor Ladd) が更に嚴密な實驗方法を案出した。尤も其れは一種の熟練を要するので、應用するにはむづかしいかも知れないが、毎朝眼の覺めた時に眼を開かずに居て、將に吾人の視界から消え去りつゝやがては必ず記憶の外へ逸し去らうとする夢を、數分の間引き留めて置く習慣を養ふ事である。さうすると吾人は、夢の中の物象や物體が次第々々に“Phospheres”の裡に溶け込んで、眼をつぶつた際に實際目撃し得る所の色彩の斑点と同じ物に歸着してしまふのを見る。例へば吾人が新聞を讀むとする。此れは夢である。眼が覺めて見ると其處にはまだ新聞が

残つて居て、その明瞭な輪廓は極き消されてしまひ、唯ところ／＼に黒點を持つた白い場面が留つて居る。此れは事實である。或は又夢がわれ／＼を廣漠たる海上へ運んで行く。吾人の周圍の大海には黄色が、つた灰色の波濤がひろがり、此處彼處に波頭なみだてが白泡を立て、居る。眼が覺めると、凡べての光景が、半ば黄色が、つた、半ば灰色の、ぎらぎらした斑点のある一つの大きな場面に變じてしまふ。場面はたしかに其處にある。ぎらぎらした斑点もそこにある。そこには實際、睡眠中に目撃し得る塵のやうなものが吾人の眼前に残つて居る。さうして此の塵が、吾人の夢を製造する役目を勤めたのである。

## 2. 『ボオドレエルの詩』

「社会及国家」大正五年六月号 (六卷六号)

前書きで言う「朝日新聞」に連載していた小説は「鬼の面」、〈遠藤〉は一匡社社員遠藤始郎である。

本文中に〈妄りに發賣禁止を喰はせて得意がつて居る當局者〉という言葉があるが、これは「中央公論」大正五年三月号の「恐怖時代」を發禁にされ、同誌五月号の小特集「出版物取締に関する当局の態度を論ず」に「發賣禁止に就きて」を寄稿



した余憤を漏らしたものである。事実、この年は例年以上に発禁が多かった。谷崎もこの後さらに、同年九月に「亡友」と「美男」を同時に発禁にされる。そして同年九月十二日の「説売新聞」には、「文壇第一の注意人物」と題する次のような記事さえ出るのである。

〈当局は氣の毒にも谷崎氏を第一注意の人物として、容赦なくやつける積りとの事で中央公論の瀧田君は折角十月号に載せ様として、もう組みまで済んだ原稿をどうしたものかと青息ついでみるさうである。当局者の一人は、谷崎氏の作はワイルド張りのものでずつとまづいものだから絶対に許さぬ（中略）と洩らしたとかこれでは睨まれた作者は無論、雑誌編輯者等の大恐慌を来すも無理はない〉

事実、「中央公論」同年九月号に掲載される筈で、予告も出していた「異端」（「異端者の悲しみ」の原題。「悲しみ」を付け加えたのは、発禁対策であろう）が、発禁を恐れて見送られている。そして同誌同年十月号には次の様な（次号小説予告）が出ているのである。

〈本号に掲載せらるべかりし谷崎潤一郎氏の長編小説「異端者の悲しみ」は氏の従来之作に見るべからざる強烈なる道德的意識の潜流せる傑作なるも、当局の文芸作品に対する取締方針不

明なるが為め、或は一部の描写によつて軽々しく全体の趣意のある所を没却し、不当なる発禁禁止の厄に罹る危険なしとせず。因て該作は其部分的改作を終るまで之が発表を見合せ、次号には別に新なる題材を捉へて約百枚の長編を執筆すべく、令弟精二氏又五十枚の苦心の傑作を寄せ、次号の小説欄は谷崎兄弟の二作品を並載して江湖の清覽に供せんと欲す。唯美主義官能主義の兄と、理想主義人生主義の弟と各其特長を発揮せるは蓋し文壇の偉觀たるべきを信ず。〉

「異端者の悲しみ」は結局、永田警保局長にあらかじめ検閲をして貰つた上、翌年七月になつて漸く掲載できた。この間の経緯は、「異端者の悲しみはしがき」にも記されているが、大正五年（八月に脱稿した）原稿は、実際には九月号には間に合わず、「亡友」「美男」の発禁を知つて、急遽十月号への掲載を取りやめたというのが真相であろう。本文にデカダンスの道德的弁護という色彩があるのは、こうした情勢を反映したものである。

次に、本文中で谷崎が説んだと言っている（ポオドレエルの評傳）は、「The British Library General Catalogue of Printed Books to 1975」によれば、「Charles Baudelaire His life by Theophile Gautier translated into English from "Por-

traits et souvenirs littéraires", with selections from his poems, "Little Poems in Prose", and letters to Sainte-Beuve

and Fraubert, and an essay on his influence by Guy Thorne, Greening & Co.: London, 1915."がある。(本文に"Gupthorne"とあるのは"Guy Thorne"の誤植である。)また

《Sturm氏の英譯》とは"The Canterbury Poets Edited by William Sharp"の一冊"The Poems of Charles Baudelaire. Selected and Translated from the French, with an Introductory Study, by Frank Pearce Sturm. The Walter Scott Publishing Co., Ltd. London and Newcastle-on-Tyne, 1906."を指す。谷崎は「ボードレール散文詩集」(「解放」大

八・十)の中でも「ヴィナスと愚人と」を訳しているが、これはどうやらSturmの英訳に拠ったものらしく、フランス語版に拠ったと見られる本文中のものは、かなり差がある。

谷崎は本文中で、《二三年前》即ち大正二三年に《ふらんす語の初歩を習ひ始めた》としているが、これは「独探」(大正四・十一)の《去年(大正三年)の二月ころ》という記述や、やはり大正三年とする谷崎終平氏の《回想の兄・潤一郎》(没後版全集月報2)と一致する。また「金色の死」(大正三・十)に《君、ふらんす語のモオパッサンはこんなに綺麗なもの

のだよ。》と書いて、《岡村君》が"Sur L'eau"を読んで聞かせる場面がある事とも符合する。

谷崎がボードレールに関心を抱き始めたのはいつ頃からか、はつきりはしないが、大正三年九月に発表した「鮎太郎」の原題が「愁の華」だった(「中央公論」大正三年八月号掲載予告による)事を考えると、この頃既に或る程度の知識を蓄えていた事は疑いない。恐らく、谷崎の尊崇する永井荷風などによつても、尋かれる所があつたのであろう。しかし、ボードレールへの言及は、Sturm訳の"The Corpse"が引用される「鬼の面」(大五・一〇五)が最初で、これは谷崎がゴオティエの「ポオドレール評伝」を読んだとする時期とほぼ重なつてもいい。その後のポオドレールと谷崎との関係を一瞥するならば、"Les Paradis Artificiels"がフランス語で引用される「病癖の幻想」(大五・十一)(この引用とランボオの「母音」の引用は、共にSturmが前掲書に付した"Charles Baudelaire: A Study"に示唆されたものと思われる。)、赤毛の女乞食に"をモチーフにした「笹櫻の光」(大七・一)、ゴオティエの「ポオドレール評伝」に言及した「前科者」(大七・二〇三)、「ヴィナスと愚人と」に「画かんとする願望」「二重の部屋」等の詩から多大な影響を受け、「Bien loin d'ici」にも言及し、ポオドレールの最

期をモデルとする「金と銀」(大七・五・七)、谷崎訳「ポードレル散文集」(大八・十、同九・一)、「ヴィナスとフル」に言及した「鮫人」(大九・一〇十)、ユーゴーが「ダンテは地獄を見て来た詩人であるが、君は地獄に生まれた詩人だ」と言つてポオドレルを推挙したという「芸術家一家言」(大九・四〇十)と続く。(ただし、これは Barbey d'Aurevilly の言葉で、前掲 Charles Baudelaire: A Study にユーゴーの言葉と共に出ている。)

これらの内、「金と銀」「前科者」「鮫人」には、ポオドレルの詩「祝福」についての「ポオドレル評伝」の次の様な解説が、はつきりと影を落としている。

「詩人はダリーラに似た淫婦の邪悪な残酷の餌食となつて愚行と嫉妬と嘲罵に追ひつめられるが、ダリーラは彼の上へ兇悪な淫靡のあらゆる極致を注ぎかけたのち、素裸で円坊主で憔悴見るに堪へない彼を、欣然として世の俗物に引渡す。しかし、彼は、侮辱と困窮と拷問とに賣めさいなまれた後、苦惱の坩堝に浄化されて、真理と美のいづれのために苦しまうとも、すべての殉教者の額に輝く、あの永遠の栄光に、光明の冠に到達する。」(引用は田辺貞之助氏の訳文によつた。以下同様)

芥川の「我鬼窟日録(別稿)」の大正八年六月九日の記事や、

「支那に遊ぶ竹、林氏夫妻」(「読売新聞」大九・五・二十五)、「余技―趣味―娯楽」(「文章俱樂部」大十一・一)等によると、当時谷崎が香料を蒐集していた事が分かるのだが、これもまた「ポオドレル評伝」の影響と見られる。そして、「鮫人」で、「南」が葉巻の匂いから(上海から杭州へ旅行した時の汽車の沿道の光景)を思い出す場面には、「詩人は(中略)「麝香とハバナ煙草」の香を語る。それは彼の魂を陽光に恵まれた岸辺へ運んで行くが、そこには、生温い青空に棕櫚の葉が扇型に浮出し、調子のよい横揺れの波に乗つて船の櫓がゆらいである。」

という「ポオドレル評伝」の一節の反響がある。なお、ゴオティエのこの「ポオドレル評伝」は、谷崎に於ける一種のイデア論にも大きな影響を与えていると見られる。

谷崎の所謂イデア論というのは、地上の娼婦的悪女を、天上の聖なる永遠女性の粗悪な分身とする考え方で、「金と銀」(大七・五・七)「アヱ・マリア」(大十二・一)「肉塊」(大十二・一〇四)「青塚氏の話」(大十五・八〇十二)「顕現」(昭二・一〇三・一)等に現れるものである。私の解釈によれば、実はこれは、谷崎のインセスト願望とインセスト・タブーから来る罪悪感の現れである。即ち、天上の聖なる永遠女性とは触れてはならない母であり、地上の娼婦的悪女とは、インセスト願望を

充たすための天上の母の分身に他ならないのである。

この谷崎流イデア論は、勿論プラトンのものとは異なっている。プラトンにとってのイデアとは、例えば真の三角形であり、「大」そのもの、「等」そのものである。プラトンは、我々が何かを大きいものと認識できるのは、そこに完全な「大」そのもののイデアと類似したものが、不完全ながら現れているからだと考える。我々の靈魂は、肉体に宿る前に、イデアの世界で「美」「大」「等」「三角形」などのイデアをあらかじめ知っており、肉体に宿る際に一旦忘れるが、その後徐々に思い出すが故に、「美」「大」等々をそれと認識できるのだとプラトンは、考えるのである。

谷崎流のイデアが、こうしたプラトンの認識論哲学とは全く異なる視覚的イメージの永遠化に過ぎない事は明らかであるが、しかし、発想的にプラトンの影響を受けている事もまた、疑いを入れぬ事実なのである。現に谷崎は『創造』(大四・四)等でプラトンに言及し、『神童』(大五・一)では「Bohn's Classical Library」の「The Works of Plato Vol. II (The Republic, Timeus and Critias) translated by Henry Davis M. A.」の内「The Timeus」chapter XIV p. 341を引用してゐる。また瀧田樗陰は、『谷崎氏に関する「雑談二三」』(「中央公論」

大六・三)の中で、谷崎が「Bohn's Classical Library」のプラトン全集を所持していたと証言している。ただし、実はプラトンは、『創造』では、両性具有に関連して「饑寒」に言及されるだけだし、『神童』でも、純然たる反現世的な形而上学として登場するのみである。従つて、『金と銀』以下の谷崎流イデア論へとそれが移行するに際しては、ゴオティエの『ポオドレル評伝』等が触媒的な役割を果たしたと見なければならぬ。その事は、谷崎が「前科者」(大七・二〜三)の登場人物の一人に同書に言及させ、〈ゴオティエは斯う云つて居る。——ポオドレルの詩の中にある女性は、箇々の、現実の女ではなく、典型的な「永遠の女性」である。〉と語らせている事からも推測できるのである。『ポオドレル評伝』には、右の意見に続いて、ポオドレルは〈淫売〉や〈邪悪な腐敗の女〉との快楽を貪りつつ、〈失墜と過誤と絶望の底から〉(ペアトリ―チエの氣高い幻)に〈両腕を差伸べ〉ていたのだ、と書かれている。また同書には、ポオドレルの「ロマン派芸術論」から、次の様な一節も引用されている。

〈「すばらしい不滅の美への本能こそわれわれに大地とその景観とを「天国」の一瞥、「天国」の照応物ともみなさせるゆえんである。すべて彼岸にあって、生によつて啓示されるもの

へのいやしがたいかわきこそ、われわれの不死性のもっとも生き生きとしたあかしである。詩によってまた同時に詩を通して、音楽によりまた音楽を通して、たましいは墓のかなたにある栄光をわずかにのぞみ見る。そしてすぐれた詩が人の目になみだをなそうとき、そのなみだはよろこびあふれる思いのあかしではない。それはむしろいらだたしい哀愁の思い、神経のねがい、不完全なこの世に流しものにされ、しかもこの地上において、啓示された天国をただちにわがものにしようにとねがう天性を証すものである。)(訳文は人文書院版ボードレール全集に拠った)

《芸術家の直観は、現象の世界を躍り超えて其の向う側にある永遠の世界を見る。プラトンの観念に合致する。——かう云ふ信仰に生きて行かうとするのが、真の浪漫主義者ではないだらうか。》という『早春雑感』(大八・四)の結語は、プラトンのみから生まれたものではないのである。

なちまた前出 Sturm の 'Charles Baudelaire : A Study' には、"religions and sects of Devil-worshippers" についての次の様な一節がある。

"These doctrines hold that the visible world is the world of illusion, not of reality. Colour and sound and perfume and

all material and sensible things are but the symbols and far-off reflections of the things that are alone real."

そして、ブレイクの『最後の審判の幻覚』から、次の様な文章が引用されている。

"The world of imagination is the world of Eternity. It is the divine bosom into which we shall all go after the death of the vegetated body. This world of imagination is infinite and eternal, whereas the world of generation, or vegetation, is finite and temporal. There exist in that eternal world the permanent realities of everything which we see reflected in this vegetable glass of nature."

これらも谷崎に、何等かの示唆を与えた可能性がなくてはならないのである。

『ボードレール評伝』は、この他にも、印度や中国など南国への憧憬を掻き立てたり、月と月光への嗜好を刺激するなど、谷崎に大きな影響を与えている。しかし、谷崎のボードレール熱の最盛期は大正九年頃までで、翌年の『AとBの話』(大十・八)になると、《ポオやポオドレールは甘いものだ》とされるようになり、その後はポオドレールの影響で猫好きになつたという『当世鹿もごき』(昭三十六・三二七)の「猫と犬」

まで、言及が途絶えるのである。(なお、後藤末雄の『潤一郎の青年像』(『毎日新聞』昭四十一・十一・十夕刊)によれば、谷崎は「猫と犬」執筆の為に「ボオドレエル評伝」を再説しようである。)

## ボオドレエルの詩

谷崎潤一郎

大變誌上に御不沙汰をした。朝日新聞に小説を連載して居た爲め、暇がないのでついつい怠けて居た次第である。「夢」の翻譯を續けようかと思つて居たら、社員の高藤氏が僕に代つて翻譯する積りで、原書を持つて行つてしまつたから、あれは遠藤氏の責任と云ふ事にする。

ふらんすのデカダンスの詩人として有名なボオドレエルの評傳を、同じ國の同じ時代の文學者のゴオティエが書いて居る。二三年前、漸く私がふらんす語の初歩を習ひ始めた時分に、或る日丸善の二階から其の本を買つて来て、辭書を引き引き讀みかけて見たがとても分らないので又古本屋へ賣つてしまつた。

然るに其の評傳が *Gift of Stone* と云ふ人の手で英語に翻譯されて、去年始めてロンドンのグリーニング會社から出版された。それを今年の春になつて私は漸く讀む事が出来た。

尤も、ボオドレエルの名高い詩集、「惡の華」*Les Fleurs du Mal*の中に收めてある多くの詩は、すでに其の以前から英語に翻譯されて居て、私も讀んだ事があつた。ゴオティエの翻譯者ギイ、ソオン氏の説に依ると、以前はボオドレエルだのベエタアだのワイルドだのと云ふ人々の著作物は、極めて上流社會の人々ばかりが讀んだもので、本の定價もなかく安くなかつたが、今日では全く事情を異にして居る。ロンドンの本屋が一シルリング位の値段で出版するラスキンやワイルドの安本が、主として中流社會の人々の間へ羽根が生へて飛ぶやうに賣れる。その賣れ行きの素晴らしいのは、本屋自身が驚いて居ると云ふ。

何事に對しても保守的だと云はれて居る英國人でさへ一般に此のくらゐ進歩した頭を持つて居るのに、讀つて日本の現在の讀書界の、狹隘にして低級なる趣味を想ふと私は何だか心細くなつて来る。日本で高級の文學書類が多量の賣れ行きを見ないのは、文學者の方にも讀者の方にも同等に罪があるかも知れない。しかし今日我が國の中流に地位を占めて居る大多數の人々

は、大概中學卒業以上の語學の力を持つて居るのだから、せめて英語なり獨逸語なりに翻譯されて居る泰西の近代思潮や文學を、味はふぐらゐの餘裕を作つてもいゝ筈である。「作つてもいゝ」どころか、是非とも餘裕を拵へて讀んで見るだけの必要があると思ふ。

デカダンスと云ふ名稱や、ポオドレエルの文名が日本に傳はつてから既に久しいものである。けれどもデカダンスの文學上の意義や、ポオドレエルの眞相は未だ少しも一般に理解されて居ない。詩聖ダンテの文名がますます高くなつて行く一つの理由は、彼の著述があまり世間に讀まれないからだと、ヴォルテールが云つて居る。日本に於けるポオドレエルの評判も稍此れに近いものがある。デカダンスと云ふ名稱がたゞ徒らに廣まれば廣まるほど、一般の世人はいよく其れを下等な、肉慾的な、極めて淺薄不眞面な放蕩主義、墮落的快樂主義の代名詞と心得て恐れ卑しんで居る。文學上のデカダンス Decadence と云ふ言葉を、*Debauch* と云ふ意味と同様に取扱つて怪しまない。若しも世人が、少くとも多少教育のある頭を持つた人々が、せめてデカダンスのチャムピオンとも云ふべきポオドレエルの詩なり評傳なりを、忠實に讀んでくれたなら、此の誤解は忽ち水釋するだらうと思ふ。妄りに發賣禁止を喰はせて得意がつて

居る當局者の、文學に對する態度などもだんだん改良されるだらうと思ふ。

ふらんすに於いてもポオドレエルは最初非常に誤解されて居た。ゴオティエはその評傳に依つて極力世間の彼に對する誤解を除かうと努めたのである。「惡の華」の開卷第一ペエチに、著者は頗る鄭重なる言辭を以て、その詩集を彼の友人なるゴオティエに捧げて居る。

A MON TRÈS-CHER ET TRÈS-VÉNÉRÉ

MAÎTRE ET AMI

THÉOPHILE GAUTIER

AVEC LES SENTIMENTS

DE LE PLUS PROFONDE HUMILITÉ

JE DÉDIE CES FLEURS MALADIVES.

此の謙讓なる言辭を以ても分る通り、實際彼はその名輩たる友人に對して、常に愛らしき弟子の態度を失はず、いかに實際が親密になつても適當なる禮儀作法を怠ることなく、その爲めに却つて我れ我れが迷成した程であると、ゴオティエが書いて居る。又、彼の舉動は生眞面目でしとやかに落ち着いて居て、寧ろ英國風の謹嚴寡黙を構へて居たと傳へられて居る。

詩集「惡の華」は其の標題の示すが如く、「惡」の美を歌つ

たものには相違ないが、彼は決して「悪」を貪り、「悪」を樂しむ、若しくは其れを獎勵したものではない。„Undoubtedly Baudelaire, in this book dedicated to the painting of depravity and modern perversity, has framed repugnant pictures, where vice is laid bare to wallow in all the ugliness of its shame, but the poet, with supreme contempt, scornful indignation, and a constant recurrence towards the ideal which is so often lacking in satirical writers, stigmatises and marks with an indelible red iron the unhealthy flesh, plastered with unguents and white lead”——彼は終つて「悪」を諷刺し、「悪」に不思議な興味と強欲とを致したが故に、「悪」を歌つたのであつた。„……It is that horror and fascination which makes the magnetised bird go down into the unclean mouth of the serpent ; but more than once, with a vigorous flap of his wings, he breaks the charm and flies upwards to bluer and more spiritual regions.”——彼は決して肉に満足し、腐爛せる官能の享樂に甘んじて居る人間ではない。彼は屢々物質的主義者だと云ふ批難を受けるが、其の實顯著なる神秘主義者であつた。自然と人間の邪曲に充ちた運命に失望して、うす暗い夜の陰に咲く罪業の花の怪しい美しさを咏嘆しつつも、彼

は猶陰鬱な悔げな瞳を空に注いで、不死に憧れ、永遠を慕うて已まなかつた。成る程彼は人間の墮落、癡癡、罪惡に對して不思議な誘惑を感じ、常にその美を歌つたけれども、彼は寧ろ其の美を通して、其の美の奥に潜む永遠に憧れ不滅を慕うて居たのであつた。彼に美感を齎らす所の地上のもう一つの現象は寧ろ永遠の實在——永遠の美の表徴に過ぎなかつた。彼自身を以て語らむれば、

„It is this admirable, this immortal instinct of Beauty which makes us consider the earth and all its manifold forms, sounds ; colours, odours, sentiments, as a hint of, and correspondence to, Heaven. It is at once by and through poetry, by and through music, that the soul gets a glimpse of the splendours beyond the tomb. Thus, ……the principle of poetry is, strictly and simply, the Human Aspiration towards Supreme Beauty: ……”なのである。だから彼の詩に於いて、靈と肉とは完全な一致を見出して居る。あらゆる場合に肉は靈のシムボルである。若しも彼の詩が地上の罪惡を歌つて居るとすれば、それは單純な肉の罪惡ではなくて、心の罪惡。——スピリチュアル、イイヴルである。彼はスピリチュアル、グツドの外に、永劫不滅のスピリチュアル、イイヴル



があつて此の世を支配して居るやうに觀じて居る。

彼は病的な官能の錯覺 *Hallucination* を求むる爲めに、阿片とハシイシユの飲用に耽り、その中毒に因つて死んだと云ふ説が一般に信ぜられて居るにも拘らずゴオティエは此れを堅く否認して居る。二三度ハシイシユを飲んだ事はあるかも知れぬが、決して彼は常習的に飲用しては居なかつたらう、不自然な藥の力を藉りずとも、眞の詩人は到る所にインスレエシヨンを求ぬる事が出来る筈だと云つて居る。ポオドレエル自身も亦飲用の害を説いて、*„But man is not so lacking in honest means of inspiration that he is obliged to invite the aid of the pharmacy or of sorcery he has no need to sell his soul to pay for the intoxicating caresses and friendliness of hours. What is the paradise that one buys at the price of eternal salvation? and why to live. (文中の“Hours”と云ふのは、錯覺の世界に幻となつて現れて来る回々敎の極樂の女神の事である。)* 彼自身が此れ程立派な言葉遣し、此れ程立派な考を述べて居るのだ、と云つて斯くも誤解をされてしまつたのであらうか。

私はここに「愚の華」の中の短い詩を二三つ抄出して見よう。それ程ふらんす語の出来ない私でも、英譯の詩を原文と對

照して見ると非常に餘韻が乏しいやうに感ぜられるから、それを再び日本語に譯しては全く詩としての生命がなくなつてしまふ。依つて讀者の便宜の爲めに Sturm 氏の英譯を借りる事にする。

デカダン派の詩人と云へば無間に醜穢な肉慾ばかりを謳歌するものゝやうに考へて居る人々の爲めに、私は何よりも「月の悲しみ」*“Tristesse de la Lune”* と云ふソネットを紹介したい。「此の詩はシエクスピアの青年時代の英國の詩人を想起せしめる」と、サント、ウウツが云つて居る。——

#### The Sadness of the Moon.

The moon more indolently dreams to-night

Than a fair woman on her couch at rest,

Caressing, with a hand distraught and light,

Before she sleeps, the contour of her breast.

Upon her silken avalanche of down,

Dying she breathes a long and swooning sigh :

And watches the white vision past her frown,

Which rise like blossoms to the azure sky.

And when, at times, wrapped in her languor deep,  
Earthwards she lets a furtive tear-drop blow,

Some pious poet, enemy of aleep,

Takes in his hollow hand the tear of snow

Whence gleams of iris and opal start,

And hides it from the Sun, deep in his heart.

何と云ふ微妙にして幽玄なるイマヂネエシヨンであらう。私  
は今までに此れ程美しい月の歌を讀んだ事がない。夜を好むホ  
オドレエルは又月の光を好んだ。彼の散文詩の中にある「月の  
恵み」"Les Bienfaits de la Lune"の如きは、此れに匹敵する  
もの幾かに支那の李太白の(Li-tai-pe)の詩あるのみと、チオ  
ティエが極力賞讃して居る。

凡そ古來の詩人のうちで、彼ほど鋭敏な嗅覺を持つて居た者  
は少いであらう。彼は屢々香氣の甘味を歌ひ、彼の詩の中には  
いろいろな珍しい國々の香の名前が始終列擧されて居る。「恰  
も世人の音楽に於けるが如く、予が魂は麝香に乗じて翺翔す  
る。」——"Mon ame voltige sur les parfums, comme l'ame  
des autres homme voltige sur la musique!"と彼は云ふ。彼の

「香」の詩は「萬國の詩」"Parfum exotique"を讀む。

#### Exotic Perfume.

When with closed eyes in autumn's eyes of gold

I breath the furning odours of your, breast,

Bebore my eyes the hills of happy rest

Bathed in the sun's monotonous fires, unfold,

Island of Lethe where exotic boughs

Bend with their burden of strange fruit bowed down,

Where men are upright, maids have never grown

Unkind, but bear a light upon their brows.

Led by that perfume to these lands of ease,

I see a port where many ships have flown

With sails outwared of the wandering seas,

While the faint odours from green tamarisks blown,

Float to my soul and in my senses throng,

And mingle vaguely with the sailor's song.

この詩の中にある *Island of Lehe* は原文の方に「ものうき島」"Une île paresseuse" となつて居る。ポオドレエルに青年時代に熱帯の國々を旅行した事があつた。プルボン、マダガスカル、セイロンの島々を經廻り、印度の大陸に渡つてガンヂスの岸邊をさまよひ、芳烈なる色彩と光線の中に浮動する南國の情調を味はうて來た事が、後年に至つてどれ程彼の詩材を豊かにしたであらう。彼の詩の中には屢々熱帯の海や香や音楽が歌はれて居る。

ついでながら、彼が南洋へ旅行したのは彼の兩親の徳運に依つたのである。ちやうど彼が *Bachelor's letters* の試験に失敗した時分に、彼の貧父がなくなつて、母は二度目の夫を迎へた。後にコンスタンチノブル派遣の大使となつた *General Aupick* と云ふ人が即ち彼の繼父であつた。此の繼父と母親とが文學者になりたいと云ふ悻の志望に不賛成な所から、旅行でもさせたらば氣が變るだらうと云ふので、彼を印度へ立たせたのである。しかしポオドレエルは全く兩親の期待に背き、却つて以前の志を益々強固にしたに過ぎなかつた。

ポオドレエルは女性を愛した。しかし彼に歌はれた女性は、類型的の女性であつて、生き生きとした個性を有する女性ではない。彼は暗愴たる夜陰の火影に朦朧と浮かび出でた、幽靈の

やうな女の容貌、——青春の血の濺れ果てた妖怪のやうな女の肉體、墓場に埋められた腐爛せる女の屍骸を打ち眺めつゝ、悔み憐れみ恐れ怨みながら、滅び行く物の一瞬の美しさを咏嘆して居る。語を換へて云へば、彼の詩に現はれて來る女は、女性の怨念、罪惡、凄麗を代表して居る永遠の *Ghost* である。コオティエは此れを各うけて "L'eternal feminine" と呼んで居る。

#### The Remorse of the Dead.

Oshadowy Beauty mine, when thou shalt sleep  
In the deep heart of a black marble tomb :

When thou for mansi on and for power shalt keep  
Only one raining cave of hollow gloom :

And when the stone upon thy trembling breast,  
And on thy straight sweet bodys supple grace,  
Crushes thy will and keeps thy heart at rest,  
And holds those feet from their adventurous race:

Then the grave, who shares my reverie,  
(For the deep grave is aye the poets friend)  
During long night when sleep is far from thee,

Shall whisper : "Ah, thou didst not comprehend

The dead wept thus, thou woman frail and weak"——

And like remorse the worm shall gnaw thy cheek.

廢類して行く肉體の醜さ淺ましさを歌つたものはまだ此の外にも澤山あつて、腐敗と惡臭と邪曲とに付き纏ふあらゆる汚物、——蛆蟲、野良犬、蛇、虱、糞に至るまで、一とたび彼の魅力ある筆に上れば、嬌のやうな美しい怪光を放つて、鬼氣人に迫るの概がある。

私はわづかに「惡の華」の中から短い三つの詩を擇んだに過ぎないが、それでも多少は此の詩人の片鱗を窺ふ事が出来るかと思ふ。「惡の華」の外に、彼の散文詩：Petits Poemes en Prose. を集めた本がある。私は試みにその一つを、私の拙い日本語に譯出して此の文章の終りに掲げる事としよう。

恐人と并ナスと (Le Fou et la Venus.)

何と云ふ素晴らしい天氣であらう！ 廣い公園が太陽の燃ゆる眼に囚はれて、ちやうど戀愛の魔力に囚はれた青年のやうに、息も絶へ絶へに喘いで居る。

地上のあらゆる物は恍惚として聲を立てず、水の流れば睡たげにどんよりと濃み滯ひ、馬鹿騒ぎをする人間の歡樂に似もやうで、自然は今や沈黙の饗宴に酔うて居る。

絶え間なく燃え盛る光りに射られて下界の萬象はいよいよきらきらと輝きを増し、昂奮させられた草木の花は、暗れ渡つた蒼穹の色と其の生彩を箇ふが如く咲き誇り、暑熱を含んだ空氣にかげらふ諸々の薫が、煙のやうに空中へ立つ登つて行く。

その時、此の萬物の喜びの中に、たつた一人の苦しみ悶えて居る人間を私は見た。

巨大な并ナスの像の足もとに一人の愚者が居る。彼は悔恨と倦怠に悩む王様たちを笑はせて、御機嫌を伺ふのを常職とする道化役者の類と見える、けばけばしい、おどけた服を身に纏ひ、鈴のついた光つた帽子を頭に戴き、寶石にひしとしがみ着いて涙に充ちた兩眼を舉げつゝ、永遠の女神の像を打ち仰いで居る。

さうして彼の兩眼がこんな言葉を語つて居る。——「私はあらゆる人間のうちで、一番卑しい、一番孤獨な奴でございます。私には、相手になつてくれる戀人もなければ友達もありません。だから私は最も哀れな禽獸よりも劣つた奴でございます。しかし私でも、たとい私のやうな者でも、永遠の美

を知る爲めに、永遠の美を楽しむ爲めに此の世に生れて参りま  
した。あゝ女神よ、どうぞ私の悲嘆と狂妄とを憐れみ給へ！」  
しかし森嚴な井ナスの像は、大理石の眼を靜かに据えて、何  
處とも知れぬ遙か彼方を一心に視詰めて居る。(大正五年五月  
稿)

(本学講師)